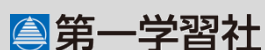


大学入学共通テスト について

広島県立安西高等学校主幹教諭 数野文明



① 出題傾向分析

■ 大学入試センター試験との違いはどこにあるのか

大学入学共通テスト（以下共通テスト）が1月に実施された。2017年から二度の試行調査が行われ、方向性が示されていたので、ほぼ予測された範囲の内容だった。ここでは大学入試センター試験（以下センター試験）との違いを改めて考えてみたい。

まず共通テストは、「センター試験における問題評価・改善の蓄積を生かしつつ」「大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力、判断力、表現力を問う問題を重視」するものとされた。高大接続の一環としての、大学教育の入り口でそれに通用する学力を、とくに基礎知識をもとにした思考力・判断力を評価する役割を期待されたといえる。

とくに「思考力・判断力」を評価するためには、様々な仕掛けを準備する必要がある。まずテーマ設定に関連した学習活動のストーリー性に関わって、メモ・スライド・会話文・発表要旨などの複数の文字資料が準備され、問いの段階でも問題文に加えて解説文や事例文、図や地図、グラフなどが関連して出されている。こうした「思考力・判断力」を評価するための複数の仕掛けが多用されているのは「思考力」評価を重視する共通テストの特性である。またセンター試験との相違点でもある。そのほかの面では、まず問題全体の質の高さはほぼ変わっていない。良問が揃い、難問は見当たらない。センター試験の良さが共通テストにも引き継がれている。大問6つの構成も変わらない。また分量もセンター試験2019以来、30頁→33頁→31頁とほぼ一定である。

ただし、高校生の学習場面が問題文の設定に複数以上使われていることはこれまでなかったことである。今年の共通テストで6問中3問に学習場面が登場する。『高等学校における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のメッセージ性』（「大学入学共通テスト問題作成方針」以下「問題作成方針」）が明らかに表現されており、生徒の主体的な「探究」活動を通じて「思考力・判断力・表現力」を育むように、という未来へのメッセージが示されたといえる。この点に最も違いがあるといえよう。

■ 共通テストでみられる問いの変化

では生徒の学習場面を設定することで何が変わったのか。それは、高校生のメモや発表要旨、スライドなど多様な文字資料が活用され、それに関連して図・地図・グラフなどの視覚化された資料を複合的に提示して問いが作成されていること、そして問いの形式が変化していることがあげられる。

次の表1はセンター試験と共通テストを問いの形式別にその数を比較したものである。

表1 共通テスト・センター試験の出題形式

問いの形式	選択肢	共通テスト 2021	センター試験 2020	センター試験 2019
組合せとして 正しいものを選び	4	14	13	16
正誤の組合せとして 正しいものを選び	4	7	6	4
文として正しいものを選び	4	2	8	7
誤っているものを選び	4	5	4	5
年代順に正しく配列せよ	6	4	5	4

これを見ると4択で「文として正しいものを選び」という単純な出題形式が2019-2021の間で7→8→2と激減し、「組合せとして正しいもの」「正誤の組合せとして正しいもの」を選びという複合的な出題形式が逆に20→19→21と微増している。全解答数が2019-2021の間で、36→36→32と減少していることを考えると、明らかに増加傾向だといえよう。これは具体的にどんな出題形式へと変化したのか。

例えば、大問の第1問の問6（解答番号6）は、次のように問う。「(デジタルデータでブラジルの貨幣の詐欺事件の新聞記事を見つけた生徒にその解説文を先生がまとめた後、記事の図と拡大した部分と訳を付したうえで) この解説文も踏まえて、日本の貨幣に関して述べた次の文a～dについて、正しいものの組合せを」選べと。リード文・解説文・新聞資料という複数の前提条件をもとに、貨幣全体という複数の歴史事項について正誤を判断させている。

また大問第2問の問3（解答番号9）では、日本の文字使用についての7世紀後半の事例二つを示したうえで、同時期の日本の漢字文化について「展開とその背景に関して述べた下の文a～dについて、正しいものの組合せを」選ばせている。ここでも生徒の発表要旨に二つの事例を前提として展開と背景という複数の歴史事象の範疇について判断させている。同じ第2問の問4（解答番号10）では「(評価) Xの根拠をa・b、(評価) Yの根拠をc・dから選ぶ場合」最も適当なものを4択から選ぶという出題がされた。第3問の問1（解答番号13）では「図を読み解く方法……X・Yと、その方法で分かることについて述べた文a～dとの組合せ」として最も適当なものを選ぶという出題、第6問の問3（解答番号28）では「語句X・Yと、その語句が入る理由a・bとの組合せ」から最も適当なものを選ぶという出題がされている。こうした出題形式が増加しているのは、歴史事象の因果や展開を解き明かすために、複眼的で多面的な思考をうながす工夫をしているからであろう。また、多様な資料から読み取った情報や習得した知識を、歴史事象の展開や推移に関連させて思考力を発揮しその因果関係や歴史的文脈に迫っていく学びを求めているからであろう。この出題形式の増加傾向は今後も続くと推測される。

「歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視」し、「授業において生徒が学習する場面や、学習の過程を意識した問題の場面設定を重視する」という「問題作成方針」からも、生徒の学習場面が今後も登場し、学習過程を意識した工夫のある問いが作られ、歴史事象の推移を因果関係で理解し、様々な角度から多面的に歴史事象を考察させようとする問いが予測される。

■ 大学入学共通テスト試行調査との比較

二度の試行調査と今回の共通テストの内容を簡単に比較してみたい。

表2 共通テストと試行調査

	2017 年試行調査
第1問	○古代中世『日本の「会議」「意思決定」の方法』
第2問	○原始古代『「国の始まり」と「国号日本」』
第3問	○テーマ学習『博物館での資料調査「絵図と寺院」』
第4問	○近世『課題学習「近世の大名」「近世の流通」』
第5問	○近代「幕末維新期の学習」
第6問	●近現代「近現代日本の経済・社会」
	2018 年試行調査
第1問	○テーマ史「開発・災害と人々の関係史」
第2問	●古代「古代の官道」
第3問	○中世「中世における外からの波と日本」
第4問	●近世「近世社会のリテラシーと記録資料」
第5問	○近代「近代日本の経済・国際関係」
第6問	○近現代「日本の近現代史と時代の転換点」
	2021 年共通テスト
第1問	○テーマ史「貨幣の歴史」
第2問	○テーマ史「日本における文字使用の歴史」
第3問	●中世「中世の都市と地方の関係」
第4問	●近世「近世社会の儀式と儀礼」
第5問	●近代「女性解放運動の先駆者」
第6問	○近現代「第二次世界大戦後の民主化政策」

表2によれば、2017-2018 試行調査から2021 共通テストにかけて出題大問数は6、出題分野も、テーマ史を除けば、古代・中世・近世・近代・近現代がほぼ均等に配置されている。○は生徒の学習場面がある問題設定、●はこれまでと同じリード文を掲げて出題する問題設定である。○印は、2018 年の試行調査以来、2017-2018-2021 の順に5→4→3と変化する。つまり生徒が学ぶ場面の資料を活用して思考力や判断力を求めて問いかける問題は、試行調査から共通テストにかけて減少し、これまでのセンター試験に近づけている。つまり、多様な資料を使って思考力を問う複雑な問いかけだけではなく、知識にも重心がかかった、解き易く基礎学力を測りやすいセンター試験的な問題が、共通テストでは試行調査に比較して増えていたことになる。一気に試行調査のように変化していくのではなく、少しゆっくりとこれ迄のセ

ンター試験内容を受け入れて共通テストは船出したのである。

■ 共通テストで目指されているもの

試行調査でも明らかになったように、共通テストが目指すものは質の高い知識理解を持ち思考力、判断力、表現力を活用して解き明かす問いである。しかし、もっと言えば2022 年の新学習指導要領の実施を前に、授業改善自体を目指しているように思える。

そして改めて「授業において生徒が学習する場面や、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面、資料やデータ等を基に考察する場面など、学習の過程を意識した問題の場面設定を重視する。」（問題作成方針）という側面を想起したい。

■ どのような授業改善でどのような学力を身につける必要があるのか

共通テストでは、今後も生徒の学習活動を軸に、良質なテーマを身近な生活体験から設定し、多様な資料を組み合わせ、複数の前提条件をもとに複数の判断事項を持つ複合的な問いかけが、今後も作成されるであろう。

それに対応するためには、これまでの基礎的な知識理解を育みそれを深化させる授業形態に加えて、生徒の「探究」という学習活動を授業の軸として組み立て、共通テスト自体も教材に活用し、こうした学習過程や問いの作成を「探究」活動に生かしていくことが必要だと思われる。

生徒の「探究」活動については、博物館や民俗資料館などでの実物学習のほかに、多くの統計データや写真資料、地図データ、公文書等のデジタル資料を検索・活用できる。昨今のアーカイブズ学や資料学の進展は、デジタル資料の検索性・利便性を急速に拡大させ、「探究」活動を深化させている。政府統計の e-Stat、国立国会図書館やアジア歴史資料センター、国立公文書館などのほか、地方の文書館や博物館、そして世界のアーカイブズ機関からも良質な資料を見出していくことが可能である。共通テストの資料として「ブラジル国立デジタル図書館」の新聞資料が提示されたのは作問者のメッセージとして示唆的でもある。検索能力を教員自体が磨きつつ生徒の「探究」活動をささえ、豊かな資料の諸特性を理解しつつ、情報の読み取り方を鍛えていくことが必要になる。また共通テストに示された生徒の発表やグループ学習、会話文を通して見える意見交換なども、生徒自身が複眼的にかつ多面的に歴史事象を理解し歴史の見方を鍛えていくうえで有効であろう。こうしてみると、共通テストは問いの全体が授業改善の宝庫であったと気づかされる。

② 設問別分析

日本史 B は大問数 6 から成る。設問ごとに何を問うているのか、解答に向けどのような思考が必要か、またどのような知識が求められるのか、について考えてみたい。

■ 第 1 問（解答番号 1 から 6、配点 18）

第 1 問は、「貨幣の歴史」をテーマに授業で発表する生徒が、博物館に事前学習に行ったという設定である。2024 年の新紙幣と新硬貨発行が、キャッシュレス化の進行のなか果たして意味があるのか、という問題関心から、古代貨幣の調査に向かうという学びの設定である。日常生活から課題を発見し解決方法を考える生徒の主体的学習が提示されている。

問 1 は高校生のメモを資料としてそこから目的に応じて情報を読み取る技能を問う問題。和同開珎発行後に銭貨が流通しないため、律令国家は蓄銭叙位令（711）や私鑄銭製造への厳罰化を図った。b が厳罰にあたり、c は叙位令で蓄銭を奨励した内容であるが、財政支出に当たるのは d である。メモを分析し対応する法令を的確に区分する資料読解の力が必要（正答④）。問 2 も絵画資料から目的に応じた情

報を読み取らせる問題。とくに布絹の存在を銭さしとともに図から読み取る。ただし咲也さんのメモ「米や布・絹なども貨幣として通用」や会話文の花さんの発言「米や布・絹が貨幣として使われてきた」がヒントになる。加えて宋銭の流入と流通という中世貨幣史の知識があれば a・d を選べる。つまりメモや会話文などの資料を読み解く技能が求められる（正答②）。問3は撰銭令と寧波の乱の知識理解を問う問題。流通に幕府も戦国大名もなく、双方とも撰銭令を出している（解答①）。問4は江戸時代の貨幣史を問う。グラフから読み取った情報を歴史的事象と関わらせて解く思考力が必要。万延小判は品位は変えず重量のみ3割以下に減らして金銀比価の違いを是正した。グラフの読解により万延小判の金の比率は57%で成分を減じていないことを見抜く（正答④）。問5は知識理解の問題。銀本位制1885年、金本位制1897年、不換紙幣発行は明治政府発足直後から行われていた。正答は⑤。問6は、資料から読み取った情報と習得した知識を活用して歴史的事象に関わらせて解く思考力を要する問題。資料から「新円切り替え」で紙切れになった旧百円紙幣を日本の敗戦を信じない日系移民（勝ち組ともいわれる）がブラジル貨幣で購入し詐欺にあったことを読解できる。これは金融緊急措置令による。戦後の猛烈なインフレとドッジ＝ラインや単一為替レート設定など抑制への基本施策の知識も必要である。aは私鑄銭不使用が誤り、dの単一為替レートは1949年で図3の事件後であるから誤り。正答は③。

■ 第2問（解答番号7から11、配点16）

第2問は「日本における文字使用の歴史」をテーマに高校生が発表する内容と資料を読み解き、文字使用と国家権力、漢字文化と他文化との関わりを考察させた思考力を要する問題。問1は文字使用の開始が中国諸王朝冊封下での国書のやり取りに始まることから、中国諸王朝の領域を時系列で問う歴史総合的な問題。領域の地図の年代を諸王朝の数と内容で類推できる。漢（1世紀）→魏蜀呉（3世紀）→北魏・宋（南北朝）（5世紀）から、正解は⑤。問2は江田船山古墳出土鉄刀銘の人名表記と資料全体の意義を考察させる問題。万葉仮名の知識やワカタケル大王の存在と稲荷山古墳が関東の埼玉県所在という基本知識があれば容易。正解は①。問3は木簡記載の漢字が東アジアの漢字文化のどこに影響かを問う問題。ここは資料を読み解く技能が必要。資料から朝鮮諸国の影響を理解できる。また解答には吉備真備や白村江の戦いについての基本年代を知っておく必要がある。正解は④。問4は国風文化の評価を唐風の減少とその影響の二面から考察させる問題。対比的な評価にそれぞれの根拠を問うており、試行調査での形式を踏襲している。日頃の学習で文化を総合的に、多面的に捉え理解することが求められる。勅撰和歌集と唐物の陶磁器が根拠となる。正解は③。問5はクラス全員によるまとめという形をとる問題。誤りは冊封体制の離脱の部分。体制参加から文字使用が始まったことが資料にあるが、これがヒントになる。正解は①。

■ 第3問（解答番号12～16、配点16）

第3問は中世の都市と地方の関係の変化を、荘園経営や武士の台頭、一揆や争乱の発生から考察させる問題。絵図や資料を読み解く技能だけでなく、その情報からわかることを歴史的事象に関わらせて思考する力が問われている。問1は荘園絵図と荘園立券を求めた史料を読み解く問題。（1）は留守所と国衙は同じ機能だと読み解けばよい。正解は①。（2）は絵図を読み解く方法に視点を置き、そこからわかることを考察する問題。荘園領域を示すものが傍示であると読み解けば b・c を選択できる。正解は③。問2は鎌倉時代の都市と地方を考察する問題。六勝寺は京都で、鎌倉は鎌倉五山。正解は②。問3は室

町時代の一揆の年代順を問うたもの。正長の土一揆 1428 年，山城の国一揆 1485 年，加賀の一向一揆 1488 年で正解は⑤。問 4 は都市と地方の交流から連歌や陶器が広まっていくことを考察させた問題。宗祇と瀬戸焼が正しい。正解は④。

■ 第 4 問（解答番号 17～21，配点 16）

第 4 問は近世の儀式や儀礼をテーマにした設問。資料と江戸城本丸殿席の模式図を読み解く技能と読み取り情報を歴史の諸事象に関わらせて思考する力が求められる。

問 1 は江戸城本丸殿席の図と説明から井伊直弼は A 溜之間，徳川斉昭は三家で E 大廊下と読み取る資料読解が必要。正解は②。問 2 は武家諸法度の発令年次の年代順の知識を問うもの。III は寛永令，II は天和令，I は「大船の建造禁止を解き」なので開国期と推測できる。正解は⑥。問 3 は，江戸幕府の対外関係の知識理解を問う問題。謝恩使は琉球国王から代替わりに派遣された。正解は③。問 4 (1) は近代以降の祝日について資料を読み解き，その情報を注や選択肢の内容をヒントに誤りを見つける思考が必要。臨時の休日は町役人に申し出て定めるため誤りは②。問 4 (2) は近代の天長節について資料を読み解く技能が問われた問題。刑罰執行停止と天長節を祝うことが正しい。天長節の知識がカギ。正解は①。

■ 第 5 問（解答番号 22～25，配点 12）

第 5 問は近代日本の女性解放運動家景山英子の事績に関する問題。景山英子は自由民権運動時に大阪事件で逮捕・投獄されるも出獄後に角筈女子工芸学校を設立し、『妾の半生涯』『世界婦人』を刊行した。そして「婦人解放」を訴えた。その生涯に関わり下級武士出身の景山英子が生きた時代背景や社会状況などが問われた。『妾の半生涯』も史料として出題された。問 1 は大阪事件の目的（朝鮮の内政改革）と日露戦後の平民社とその創立者幸徳秋水の知識理解を問うもの。社会主義に近づくところがあるので正解は①。問 2 は維新期の薩摩の中心人物西郷と，幕臣の榎本武揚が降伏した場所の知識を問う問題。正解は②。問 3 は角筈女子工芸学校を設立した目的を史料読解から読み解き，時代背景の知識を問うもの。目的は中流以下の女子の生計の助けとなる技術の教授だった。また教育勅語は 1890 年で，義務教育 6 年間への延長は 1907 年である。これら教育分野の基本知識を持つ必要がある。正解は④。問 4 は 1907 年ごろの女性の状況や解放の動きの知識を問う。新婦人協会は 1920 年。女性の政治集会禁止は治安警察法の 1900 年成立以後。女性解放の一定の流れを知識として持つ必要がある。正解は③。

■ 第 6 問（解答番号 26～32，配点 22）

第 6 問は「第二次世界大戦後の民主化政策」をテーマに生徒が発表するスライドを題材とした問題。農地改革の歴史的背景やその過程・実績を生徒がまとめ，スライドを資料として設問するという設定である。

問 1 は明治期の地主制の問題。小作料を現物の米で受取り米価上昇で大きな利益を得たのが地主である。現金は誤り。小作人は 6 割に近い高率の小作料を払うため家計補充的に娘などを製糸や紡績工場などに嫁ぎに行かせた。明治期の寄生地主制の基本的な知識理解があれば解ける。正解は③。問 2 は大正デモクラシー期に活動した団体を問う知識理解の問題。全国水平社が大正期に水平社宣言などを起草し普遍的な人権を求める活動を行ったことを知っていれば解ける。問 3 は寄生地主制の発展と動揺について，その語句と理由の最も適切な組合せを求める問題。寄生地主制の変化が大正期の小作争議により

起こされていることをまとめたスライド1がヒントになる。スライド資料を読み解く技能と、読み取った情報を寄生地主制の変化という歴史事象に関わらせて思考する力が求められる。正解は④。

問4は戦時体制下の物資統制に関する知識を問う問題。砂糖・マッチなどの切符制が1940年に開始、価格等統制令は国家総動員法成立の翌年、1939年に導入された。米の供出制の開始時(1940)と同様でどちらも正しい。正解は①。戦時体制の問題はセンター試験でも頻出とされている。基本的な知識理解を確認しておきたい。問5は戦時期の農業統制に関わる政策とその目的の組合せについて正しいものを選ぶ問題。資料としてスライド2の内容を読み解く技能と読み取り情報を寄生地主制と食糧生産に関わらせて思考する力を求める問題。小作人を優遇する政策はスライド2の自作農創設などから明らかであり、その目的も同じ資料の総力戦のための「食糧の安定供給」と考えられる。正解は②。問6は、農地改革の過程と実績についてスライド3の資料やグラフを読み解く技能と知識を問う問題。グラフで兼業農家の変化をみると1935年は30%前後だが1965年には80%程度に上昇している。一方経営規模は9割が2.0ha以下で戦前期と変わらない。つまり正解は④。なお①は寄生地主制が高率の小作料で多くの小作人を貧困にとどめ国内市場が狭いままだったことが日本の軍国主義が海外へ市場を求めて侵略する原因の一つになったとGHQがみていたことをさす。問7は農地改革の学習のまとめとして戦後の農業を考察させる問題である。農地改革で農家の大部分が自作農になるが、経営規模が依然低いままだったことが資料から読み取れる。米の生産調整のために減反政策を行い、経営規模改善のために農業基本法が制定されたことが理解できる。正解は①。なおこのようなa・bの比較とc・dの比較による正誤判断が求められる問題については、この形式になれることで対応し易くなる。

本分析資料のほか、他教科・他科目の分析資料(PDF)もダウンロードできます。



 **第一学習社**

広島本社

733-8521 広島市西区横川新町 7-14

TEL 082-234-6800